

### 『心理社会的 プログラムガイドブック』

池淵恵美＝著

2024年4月発行  
2,750円（2,500円＋税10％） 医学書院



（書評者）  
群馬県立精神医療センター  
精神科ソーシャルワーカー  
木暮明菜

## 「巨大こいのぼり」を肯定する

「トラップやオセロをすることに意味があるのか？ 精神障害を持つ人たちのリカバリーに確実に役立つと自信を持って言えるのだろうか？」そのような思いを心の片隅に持ちながら現場の支援をされているスタッフは少なからずいるのではないのでしょうか。

私自身、経験を重ねても確固とした自信がない状態が続いていたのです。

本書は私のような現場のスタッフに対し、エビデンスのあるものもないものも、意味があると励ましてくれる貴重なものだと思います。①どんな手段を用いるのかと、②プログラムの目標がどこに置かれているのかの軸で整理することで、プログラムの特徴がすっきりと整理されていきます（p.16～20）。

この分類を意識するようになってから、現場での支援に行き詰まったときでも、プログラムの幅が広がっていく感覚を味わうことができました。創作活動のプログラムで、大きなビニール袋で「巨大こいのぼり」を作成したときのことです。お菓子の包装紙や広告、色画用紙を鱗の形に切り、筒状にしたビニールのこいのぼりに鱗をテープで貼っていく作業を行いました。最初、鱗を貼る作業は一人で気軽に取り組めるため、対人交流が苦手なメンバーさんを対象としていました。しかし、鱗貼りは根気の必要な作業ということもあり、疲れてしまう人もいたのです。私は内心「ちょっと失敗したかなあ？ これでは完成できず達成感を得られないかもしれない」と焦りました。しかし、しばらくするとメンバーさん間で「疲れたから休めます」「じゃあバトンタッチしましょう。ここからは私が貼るね」「ありがとう」「色を少しずつ変えてみない？」「そうだね」と言いながら、鱗貼り作業を協力して行う場面に遭遇したのです。作品が個人のもの

からみんなのものになっていく瞬間でした。分類の中で配置したプログラムの位置が展開によって広がりをもち、新しい目的があることもわかってきます。すると、空間の中で繰り上げられる出来事そのものに意味があり「楽しい」と感じられるようになったのです。

また、本書では、さまざまなプログラムが丁寧に紹介されています。その中でとても驚いたのが「卒業式」のプログラム（p.145）です。個人的には「え？ そのようなお別れのセレモニーをしてしまって大丈夫なのだろうか？ その後の生活がうまくいかず、再度デイケアを利用することになったら、気まずいのではないだろうか？」と思いました。しかし、当センターのメンバーさんの多くが帰りの会で「今日でデイケアを卒業します。就労に向けて頑張ります。ありがとうございました」と自分から挨拶されていたのです。私は少し心配しすぎだったかもしれません。デイケアは「当事者がリアルワールドでどのように社会に参加すればよいかの練習を行える場（p.142）」です。リアルワールドでうまくいかなければ、再度デイケアでシミュレーションしていけばよいのだと気付かされました。

現場では、設備、予算、参加人数やグループの雰囲気、回復段階に合わせた支援、スタッフの人数などさまざまなことを考慮した運営が求められます。デイケア空間を維持するためにスタッフが主体となってしまうことに葛藤もありましたが、本書を読んで、「次はこの部分を当事者主体で決めてもらおう」というように違ったアプローチも考えられるようになってきたように思います。支援を再度組み立てる前向きなエネルギーが、自分の中に生まれてきたのです。

精